

国立国語研究所学術情報リポジトリ

数詞のアクセントを通して見た喜界島語彙の音韻特徴

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松森, 晶子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002432

数詞のアクセントを通して見た喜界島語彙の音韻特徴¹

松森 晶子

1 琉球祖語の名詞アクセントの3つの系列

琉球諸方言は、今日のように様々な体系に分岐・発達する前（琉球祖語）の段階で、その名詞のアクセントに（少なくとも）3つの型を持った体系であることが、現在までに分かっている。ここではその3種のアクセントの区別を、それぞれ「A系列、B系列、C系列」と呼んで議論を進めることにしよう。

各系列に属す代表的な語を、現在の喜界島の赤連方言と沖縄本島中部の金武方言の例を用いて示すと、次のようになる。（カッコ内の語形は1つ目が赤連方言、二つ目が金武方言の例である。）

(1) 3つの系列の代表的な語例（喜界島赤連、沖縄本島金武）

（本土の類別語彙と音の対応がみられると思われる単語は、下線で示した。）

A系列: 夫(wutu, utu)、煙(hibusji, kibusji)、子(k'aR, kwaR)、鮫/草履(saba, saba)、

空(tiNtoR, tiNto)、妻(tuzji, tuzji)、棘(njinji, Nzji)、洞窟(gama, gama)、
友(dusji, duRsji)、匂い(hada, kazja)、にんにく(hiru, hiru)、膝小僧(t'ubusji,
suNji)、へそ(Fusu, Fusu)、ほくろ(ada, aza)、目上の人(sjida, sjirzja)、
東(agari, agari)、北(nisji, nisji) / 血(cjiR, sjir)、帆(FuR, FuR)、
鳥賊(ika, icja)、石(isji, isji)、上(wiR, wiR)、魚(iju, juR)、牛(usji, usji)、
音(utu, utu)、風(hadi, kazji)、紙(habi, kabi)、傷(cjidu, kizju)、
牙(kiba, sjirba)、口(k'ucji, kucji)、腰・背中(husji, kusji)、酒(seR, saki)、
下(s'a, sjicja)、袖(sudi, sudi)、箱(haku, haku)、鼻(hana, hana)、
羽(hanI, hani)、人(c'juR, cjuR)、水(midu, mizu)

B系列: 家(jaR, jaR)、鱗/ふけ(iQki, iricjiR)、男(jiNnga. ikigaR)、女(wunangu,

inaguR)、雷・稲光(haNnari, kaNnamiR)、着物(kiN, sjinuR)、櫛(sabacji,
sabacjiR)、去年(hudu, kuRzjui)、砂糖黍(wuni, wuRzjiR)、潮(usu, uRsuR)、

¹ 草稿を詳細に検討し、多くの有益なコメントを下されたウェイン・ローレンス氏に心より感謝いたします。（しかし本稿の不備は、もちろんすべて著者の責任である。）

炊事場のある家屋(toRgura, tuNgwaR)、脛(suni, suRniR)、蛸(toR, taRkuR)、
 土(micja, NRcjaR)、南京豆(zjimami, zjiRmaRmiR)、肉(sjisji, sjiRsjiR)、^{にら}蕪
 (bira, biRraR)、暇(madu, maRduR) / 木(hiR, kiR)、目(miR, miR)、手(tiR, tiR)、雨(ami, aRmiR)、網(ami, aRmiR)、板(ita, iRtaR)、色(iru, iRruR)、
笠・傘(hasa, kaRsaR)、肩(hata, kaRtaR)、雲(k'umu, kuRmuR)、米(humi, kuRmiR)、島(sjima, sjiRmaR)、汁(sjiru, sjiRruR)、^{つの}角(cunu, sjuRnuR)、顔(cura, suraR)、花(hana, haRnaR)、腹(wata, waRtaR)、豆(mami, maRmiR)、
 味噌(misu, miRsuR)、耳(mimi, miRmiR)、麦(muni, muRzjiR)、山(jama, jaRmaR)、亀(hamiR, kaRmiR)、涙(nada, naRdaR)、鏡(kangami, kagamiR)、鋏(hasami, hasamiR)、油(aNda, aNdaR)、枕(maQka, maQkwaR)、曆(kujumi, kujumiR)

C系列: あご(utungeR, utuge)、蚊(gazjami, gazjamu)、かかと(aduR, aRduR)、
 かんざし(giRFaR, zjiRha)、^{かご}籠の一種(tiru, tiRru)、杵(adumu, azjumu)、
 今年(kuNdu, kuNdu)、子供(warabi, warabi)、腰周り(gamaku, gamaku)、
 砂糖(sataR, saRta)、^{ざる}筥・籠(soRki, soRki)、太陽(tida, tiRda)、卵(hungaR, kuRga)、
 たんこぶ(gabuR, guRFu)、杖(gusani, gusanu)、ひしゃく(nIbu, niRbu)、
 布団(udu, uRdu)、水溜り・池(humuri, kumui)、来年(jani, jaRni) / ^{かめ}甕(hami, kaRmi)、蚤(numi, nuRmi)、浜(hama, haRma)、骨(Funi, FuRni)、
糸(iejuR, iReju)、臼(usu, uRsu)、海(umi, miR)、桶(wiR, wuRki)、
 影(kangi, kaRgi)、声(kui, kwiR)、露(cuju, suRju)、鍋(nabi, naRbi)、
針(hari, haRi)、舟(FunI, FuRni)、松(macu, maRcju)、袋(FuQku, FuQkui)、
薬(kusuri, kusui)、鹽(tareR, taRre)、柱(haRja, haRja)、
畑(hateR, hataki)、

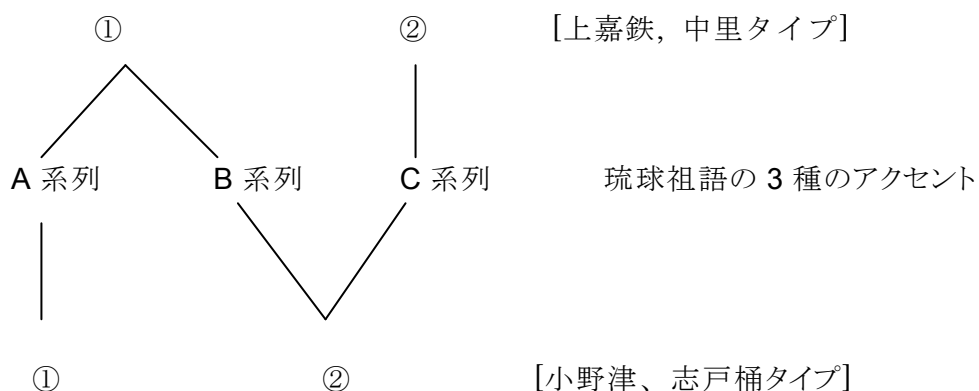
沖縄本島の金武方言では、この3つの系列の語彙はそれぞれ異なるアクセント型で出現する。つまり金武方言では、琉球祖語から引き継いだ3種のアクセントの区別が、現代に至るまで保たれているのである。また、奄美の沖永良部島や徳之島の諸方言でも、祖語に存在していたと思われる3つの系列のアクセントの区別が、現代に至るまで比較的明瞭に保たれている。

現代喜界島には、この3種類の区別のすべてを、現代に至るまで保存している方言は存在しない。これまでの研究から、喜界島ではそのほとんどの集落で2種のアクセント型の

区別があることが分かっているが、これら喜界島の「2型アクセント体系」では、どの地域でも、過去の3つの系列のうちのどれか2つが合流してしまっていることが分かっている。

しかし、喜界島諸方言の重要な点は、その合流の仕方が方言によって異なるという点である。たとえば、今回、調査した地域の中でも小野津と志戸桶では、B系列とC系列が合流してひとつのアクセント型になってしまい、「A 対 BC」のような対立を示すタイプの体系になっている。これに対し、それ以外の地域（中里、荒木、上嘉鉄、坂嶺、阿伝など）では、A系列とB系列が合流してひとつのアクセント型になり、「AB 対 C」のような対立のタイプの体系になっている。以上をまとめて図式化すると次のようになる。

(2) 喜界島の2型アクセントの形成



このことから、喜界島が今日のように集落ごとに異なる方言に分岐する前の祖先の体系（喜界島祖語）では、琉球祖語から引き継いだ3つの系列のアクセントの区別が、おそらく、まだ保たれていたであろう、という推定ができる。

また、(2)のような語彙の合流の仕方の違いを利用して現代の喜界島方言の比較を行えば、各単語のそれぞれについて、それが喜界島祖語の段階で存在していた3つのアクセント型のどの型に属していたかを、推理することができる。松森(2011)では、小野津と赤連の比較を通じて、そのような試みを行っている。

2 数詞のアクセントの系列

2.1 固体を数える数詞

さて、「ひとつ、ふたつ、みつつ…」、「ひとり、ふたり…」のような、ものを数える際に使用する数詞のアクセントが、琉球各地できれいな対応を見せることはローレンス

(2008) がすでに指摘している。

沖永良部島や徳之島といった、琉球祖語の3系列の区別を現在も比較的、明瞭に保っている方言を手がかりにして、各数詞が琉球祖語において、上に述べた系列のうちのどれに属しているかを推定してみると、「ひとつ」はC系列、「ふたつ、みっつ、よっつ、むっつ、やっつ、とお」はA系列、「いつつ、ななつ、ここのつ」はB系列、ということになる。² このことを確認するために、これまで私の調査した沖永良部島知名方言と正名方言の例を以下に示す。正名方言の例は、単独言い切り形の他に、主格助詞の nu をつけて「～がある、～が見える」のように発話してもらった形式（接続形）のアクセントも調査したので、ここに載せる。（なお、知名方言については久野(1986)も参照した。）

(3) 日本祖語系数詞の琉球祖語における系列と現代3型アクセントの例

	系列別	【沖永良部島知名方言】	【沖永良部島正名方言】
		単独形	単独形 / 主格助詞接続形
1. ひとつ	C系列	tiRc̄ji	t'iRc̄ji / t'iRc̄ji nu...
2. ふたつ	A系列	taRc̄ji	t'aRc̄ji / t'aRc̄jinu...
3. みっつ	A系列	miRc̄ji	miRc̄ji / miRc̄ji nu...
4. よっつ	A系列	juRc̄ji	juRc̄ji / juRc̄ji nu...
5. ひとつ	B系列	ic̄jic̄jiR	ic̄jic̄jiR / ic̄jic̄ji nu...
6. むっつ	A系列	muRc̄ji	muRc̄ji / muRc̄ji nu...
7. ななつ	B系列	nanac̄jiR	nanac̄jiR / nanac̄jinu...
8. やっつ	A系列	jaRc̄ji	jaRc̄ji / jaRc̄ji nu...
9. ここのつ	B系列	kunuc̄jiR	kunuc̄jiR / kunuc̄ji nu...
10. とお	A系列	tuR	tuR / tuR nu...

たとえば知名方言では、「1つ」(C系列)のアクセントは語末拍が高い音調(H)となり、LLHのような型(Lは低い音調を示す)であるのに対し、「2つ、3つ、4つ、6つ、8つ」(A系列)は、高い音調が語末まで続くHHHのような型である。これに対し「5つ、7つ、9つ」(B系列)は、「1つ」と同様に最後が高く終わるのだが、その高い音調は「1つ」と違って、語句末のモーラを引き伸ばすことによって実現する。したがって「5つ、

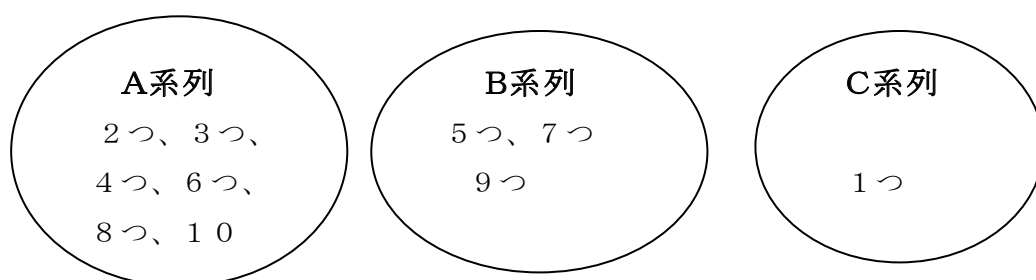
² ローレンス(2008)は、祖語の数詞に2つのタイプの型の区別があったとしているが、実際は、日本祖語の数詞には3つの型(「1」対「2、3、4、6、8、10」対「5、7、9」)が存在していたことが琉球の3型アクセント体系を広範に検討すると分かる。(ちなみに本土の類別語彙では、「ひとつ」は(3拍語)第5類、「ふたつ、みっつ、よっつ、やっつ」は第2類、「いつつ、ななつ」は第7類となっている。したがって本土の方言でも、3拍語の第5類と第7類の違いが保たれている現代方言では、「ひとつ」と「いつつ、ななつ」も異なるアクセント型で出現する可能性がある。)

7つ、9つ」は、語末拍が上昇調の LLL_H のような型である。

一方、正名方言でも、「1つ」と「5つ、7つ、9つ」の型の区別ははっきり保たれている。「1つ」の語頭の下がり目は1拍目にある (t'i)R[cji] のに対して、「5つ、7つ、9つ」の下がり目は icji]cji[R のように、2拍目にあるからである。

一般的に琉球祖語の3つの系列(A, B, C系列)の区別が保たれている方言では、「1つ、2つ…」という数詞のアクセントにも3つの型が出現する。そして、その数詞は、A、B、C系列に、次のように分布している。

(4) 琉球の三型アクセント体系における数詞の分布

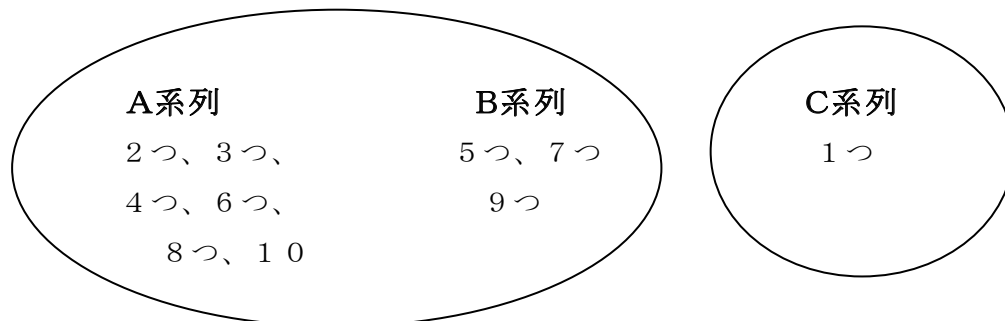


さて、喜界島のような2型アクセント体系では、数詞はどのような実現の仕方をするだろうか。

少なくとも現段階での仮説だが、一般的に、現代の琉球方言の2型アクセント体系では、その名詞のアクセントの合流の仕方と、数詞のアクセントとは、相関性が見られると考えられる。

たとえば、名詞のアクセントが「A B 対 C」のような合流を遂げた方言（たとえば喜界島の上嘉鉄、中里、湾、阿伝、坂嶺や宮古島の与那覇など）では、(5)のように「1つ」以外の数詞が合流してひとつの型となってしまう、「1つ」だけが他の数詞とは別の型に属すということが予想される。

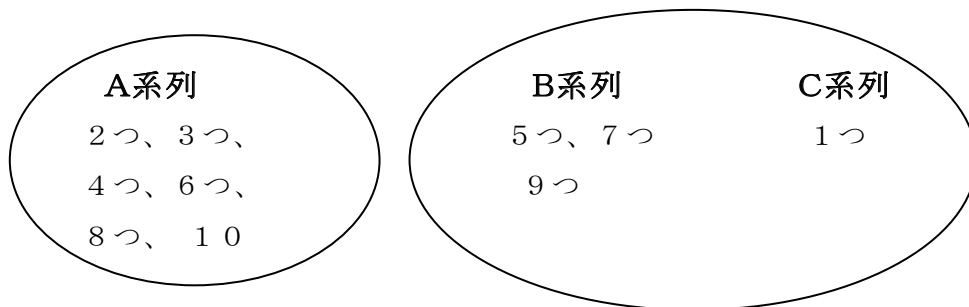
(5)



これに対して、名詞のアクセントが「A 対 B C」のような合流を遂げた方言（たと

えば喜界島の小野津、志戸桶や加計呂麻島諸方言など)では、「5つ、7つ、9つ」と「1つ」が合流してひとつの型となり、その他の数詞「2つ、3つ、4つ、6つ、8つ、10」と対立していることが予想される。したがって、次のようにアクセントの型が合流していることが予測される。

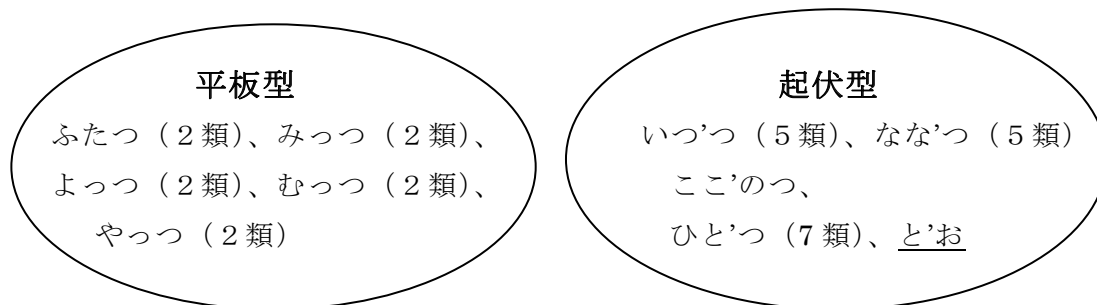
(6)



ところで、琉球各地の数詞のアクセントは、本土諸方言ともきれいな対応を見せていることは、すでにローレンス(2008)の指摘にあるとおりである。

ちなみに東京方言を例にとって説明すると、「1つ、2つ…」のような数詞は、「1つ、5つ、7つ、9つ」対「2つ、3つ、4つ、6つ、8つ」というような合流を遂げており、それぞれ異なる型に分かれて出現する。前者は、起伏型「ひと’つ、いつ’つ、なな’つ、ここ’のつ」で出現し、後者は平板型「ふたつ、みつつ、よつつ、むつつ、やつつ」になる。³(なぜか東京では「10」だけが、予測されるような平板型でなく「と’お」のように起伏型で出現して例外となっているが、その理由は不明である。)

(7) 東京方言の数詞の型の違い(カッコ内の数字は類別)



³ ただしすべての数詞にこのような違いが出現するとは限らない。たとえば接続詞「日(か)」が付くと、「(ついたち)、ふつか、みっか、よっか、いつか、むいか、なのか、ようか、このか、とおか」のように、どの数もすべて平板型になってしまう。これとは反対に、「月」が付くと、「ひと’つき、ふた’つき、み’つき、よ’つき」のように、すべて起伏型になる。これは、接尾辞「日(カ)」「月」の持つ特徴によるものと考えられるが、このような接尾辞によるアクセント型の違いを各地の方言で記述しておくことは、今後の記述研究のテーマのひとつである。

このように、本土の諸方言ともアクセントがきれいに対応するという事実は、このような数詞が（琉球も含めた）日本語の祖先—つまり「日本祖語」—から引き継がれて、現在に至ったものであることを証明している（ローレンス 2008）。

ところで「ひとつ、ふたつ…」のような数詞は、「いち、に一、さん…」と数える漢語系の数詞と対比して、よく「和語系の数詞」と呼ばれることがあるが、先述のように、これが琉球と本土の諸方言が分岐する前の段階から存在していたことをも考えあわせると、これを「和語系」と呼ぶのは相応しくない。そこで、ここではこれらを、「日本祖語系数数詞」というように呼び代えて、議論を進めることにしよう。

2. 2 人を数える数詞

一方、人を数える「ひとり、ふたり…」のような数詞はどうであろうか。

本土諸方言では、「ひとり、ふたり…」のように人を数える場合、途中から漢語系の数詞に置き換わってしまうことが多い。たとえば東京方言では、「ひとり」と「ふたり」には日本祖語系数数詞を使用するのだが、3人以上になると、(7)にあるように「さんにん、よにん、ごにん、ろくにん、しちにん、はちにん、くにん、じゅうにん」のように漢語系数数詞が使われるのである。⁴

(8) 日本祖語系数数詞の東京方言における実現

系列別（類別）	a. 単独形（個体を数える）	b. 単独形（人を数える）
1. C 系列（7 類）	ひと'つ	ひと'り
2. A 系列（2 類）	ふたつ	ふたり
3. A 系列（2 類）	みっつ	——（さんにん）
4. A 系列（2 類）	よっつ	——（よにん）
5. B 系列（5 類）	いつ'つ	——（ごにん）
6. A 系列（2 類）	むっつ	——（ろくにん）

⁴ 東京では「4人」の数値部分「4」だけが、予想される漢語系語根の「し」ではなく、日本祖語系の語根「よ」になっている。「死人」との連想を回避するものであろう。

7. B 系列 (5 類)	なな' つ	—— (しちにん)
8. A 系列 (2 類)	やっつ	—— (はちにん)
9. B 系列	ここのつ	—— (くにん、きゅうにん)
10. A 系列	どお	—— (じゅうにん)

さて、今回の喜界島調査では、人を数える数詞に関して面白いことが分かった。本土諸方言と違って喜界島には、漢語系ではなく、日本祖語系数詞が *tçuri* (ひとり)、*t'ari* (ふたり) のみならず、*mitçari* (3人)、*jutari* (4人)、*ʔitutari* (5人) … (上嘉鉄の例) のように、「3人」以上にも使われる集落が相当数あったのである。⁵

3 数詞アクセント調査結果と問題提起

さて、名詞が「AB 対 C」のような合流を遂げた地域 (湾、阿伝、上嘉鉄、坂嶺など) では、「1つ」だけが別の型になり、「2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ、8つ、9つ、とお」などが、すべて同じ型になってしまうのではないかという予想を、すでに (5) でたてた。その予想はほぼ当たったのだが、ひとつだけ例外があり、それは「9つ」であった。

今回の喜界島調査では、このような「AB 対 C」タイプの方言の中から、特に上嘉鉄、中里、湾、阿伝、荒木、坂嶺において「ひとつ、ふたつ…」の数詞を詳細に調査できたので、その結果を (9) に示そう。ここで特に注目してほしいのは、下線部である。

(9) 喜界島における日本祖語系数詞のアクセント 1 (固体を数える数詞の場合)

	上嘉鉄	中里	湾	阿伝・荒木	坂嶺
1. ひとつ	t'i]tu	t'i]tu	t'i]tu	t'i]tsu	t'i]tsu
2. ふたつ	t'a]:[tu	t'a]:[t'u	t'a]:[tu	t'a]:[tsu	t'a]:[tsu
3. みっつ	mi]:[tu	mi]:[t'u	mi]:[tu	mi]:[tsu	mi]:[tsu

⁵一般に、他の多くの琉球方言では、「4人」までは *tçuri* (1人)、*t'ari* (2人)、*mitçari* (3人)、*jutari* (4人) のように日本祖語系数詞を使うものの、「5人」以上になると *guniN*(5人)… のように漢語系を使う地域が多いとされている。しかし喜界島以外の琉球諸地域でも、まだ「5人」以上の数詞に日本祖語系数詞が使われ続けている地域が相当数あると思われ、詳細な調査が期待される。また、久野(1986)の試みたように、他の接尾辞「～日」「～月」「～粒」などの形式も調査し、各集落ごとにそのそれぞれについて、どの数に至るまで日本祖語系数詞が使え

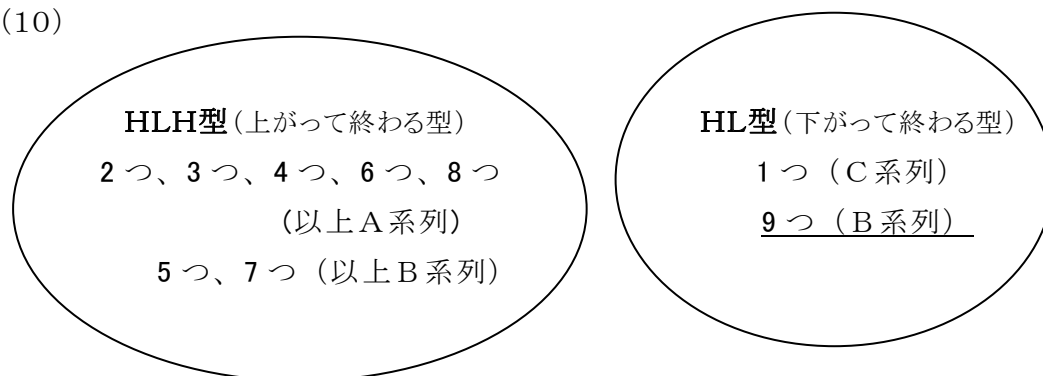
4. よっつ ju]:[tu ju]:[t'u ju]:[tu ju]:[tsu ju]:[tsu
5. いつつ ?i]tu[tu ?i]tu[t'u ?i]tu[tu ?i]tsu[tsu ?i]tsu[tsu
6. むっつ mu]:[tu mu]:[t'u mu]:[tu mu]:[tsu mu]:[tsu
7. ななつ na]na[tu na]na[t'u na]na[tu na]na[tsu na]na[tsu
8. やっつ ja]:[tu ja]:[t'u ja]:[tu ja]:[tsu ja]:[tsu
9. ここのつ k^hu]:[nu]tu k^hu]:[nu]t'u k^hu]:[nu]tu ku]:[nu]tsu k^hu]:[nu]tsu
10. とお th^u]: th^u]: th^u]: th^u]: th^u]:

この表に載せられたすべての方言で、「1つ」は下がって終わるアクセント型（HL型）なのに対して、「2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ、8つ、とお」は上がって終わるアクセント型（HLH型、あるいはLH型）であることが（8）から分かる。つまり予測通り、これらの方言では、「1つ」対「2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ、8つ、とお」というようなアクセントの型の違いが見られた。

しかし、問題は「9つ」である。（5）によれば、この「9つ」には、「5つ、7つ」と同じような型が出現しなければならない。したがって、たとえば上嘉鉄を例にとると、「9つ」には、5つ（?i]tu[tu）や7つ（na]na[tu）同様、HLHのように上がって終わるアクセント型が出現し、*k^hu]:nu[tu、あるいは*k^hu]:nu[tuのような型で出現することが予想される。

しかしこの予測に反して「9つ」は、「1つ」t'i]tuと同様、下がって終わる型で出現し、k^hu]:[nu]tu（HLHL）のようなアクセントになっていることが判明した。したがって、次のような予期せぬ結果に終わったのである。

(10)



るかを検討しておくことは、琉球記述研究の重要な課題のひとつである。

この「9つ」のアクセントの例外は、一体どのような理由によるものだろうか。この問題についての考察は、次節（第4節）で扱うこととする。

さて、次に人を数える日本祖語系数詞「ひとり、ふたり…」のアクセントを見てみよう。今回の調査でこの形式を詳しく調べることができたのは、上嘉鉄、中里、坂嶺の3集落であるが、その調査結果は次の表の通りである。

(11) 喜界島における日本祖語系数詞のアクセント 2（人を数える数詞の場合）

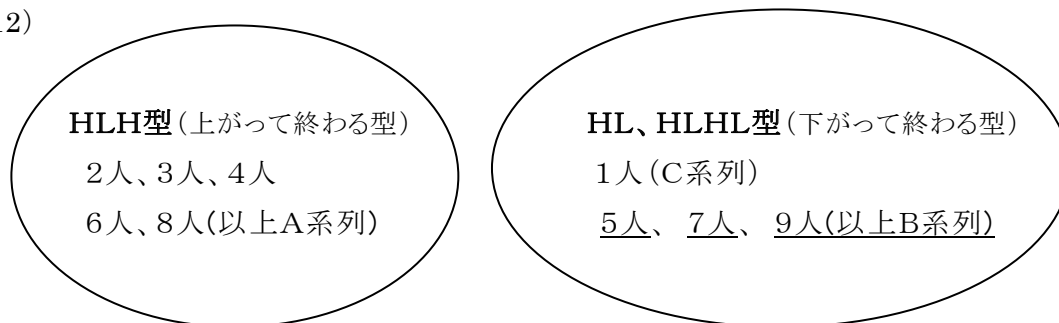
	上嘉鉄	中里	坂嶺
1. ひとり	tɕu ri	tɕu i	ts'u i
2. ふたり	t'a ri	t'a i	t'a i
3. 3人	mi tɕa ri	mi tɕa i	mi tɕa i
4. 4人	ju ta ri	ju t'a i	ju t'a i
5. 5人	<u>ʔi tu ta ri</u>	<u>ʔi tu t'a i</u>	<u>ʔi tsu t'a i</u>
6. 6人	mu ta ri	<u>mu :t'a i</u>	mu t'a i
7. 7人	<u>na na ta ri</u>	<u>na na t'a i</u>	<u>na na t'a i</u>
8. 8人	ja ta ri	ja ta i	ja ta i
9. 9人	<u>kʰu nu ta ri</u>	<u>ku nu ta i</u>	<u>ku nu t'a i</u>
10. 10人	tʰu ta ri	未調査	未調査

特に下線部に注目してほしい。予想(5)では、「1人」だけが独立した型になり、「2人、3人、4人、5人、6人、7人、8人、9人、10人」などは、すべて同じ型になってしまうのではないかということであった。しかし実際は、予想に反して、tɕu|ri（ひとり）の他に、ʔi|tu|ta|ri（5人）、na|na|ta|ri（7人）、kʰu|nu|ta|ri（9人）なども、下がって終わる型（HLHL）となって出現したのである。⁶

つまり、人を数える数詞は、上嘉鉄、中里、坂嶺で、(12)のような合流を遂げていることが分かった。

⁶ なぜか中里の「6人」だけが、期待される mu|t'a|i ではなく mu|:t'a|i のようなアクセント型で

(12)



この(12)を見ると、あたかも「琉球祖語」のA系列とB・C系列の違いが、喜界島で、人を数える数詞に限って保たれているように見える。つまり、(11)の3集落では、普通名詞は「AB 対 C」のような合流を遂げたのだが、この人を数える数詞に限って「A 対 BC」のようになっているように見えたのである。

しかし、実態はそうではないことが分かった。では、このように名詞が「AB 対 C」のような合流を遂げた地域(上嘉鉄、中里、坂嶺)で、A系列とB系列の人を数える数詞だけが合流せずに、別の型に属しているという事実の原因は、いったい何であろうか。

次節では、この問題について考えていくこととしよう。

4 数詞アクセントの例外と喜界島の無標のリズム構造

さて、前節で問題提起した謎を解く鍵は、単語全体の長さ(拍数)にある。このことを検証するために、しばらく数詞以外の名詞のアクセント特徴を検討してみよう。

松森(2011)では、「AB 対 C」タイプの合流を遂げた赤連と、「A 対 BC」タイプの合流を遂げた小野津の比較を通じ、どちらのタイプの方言でも、全体の長さが1拍~3拍までの語彙については、その2種のアクセント型に比較的バランスよく語彙が所属しているのに対し、全体が4拍以上の長さの語彙になると、HLHL というようなリズム構造を持ち、語末が下がって終わるアクセント型の単語が、両方言ともに増加していくことを指摘している。

たとえば(13)は、今回の喜界島合同調査によって上嘉鉄で収集された、4拍以上の長さを持つ語を、そのアクセント型によって分類したものである。これを見ると、HHLHのように語末が上がって終わる型よりも、HLHL(HHLHL)のように語末が下がって終わる型のほうが、その所属語彙が多いことが分かる。

出現したが、この原因は不明である。

(13) 喜界島上嘉鉄方言の4拍以上の語彙の型とその所属語彙

○ **HHLH 型** (語末が上がって終わる型)

hiza]çi[mu (脛)、 ju:]we[: (祝い)、 se:]mu[ri (結婚式)、 k^hogota[na (小刀)、
ma] çim[ma (昼)、 hammja]:[ri (雷)、 t^hin]to[: (空)

○ **HLHL 型** (語末が下がって終わる型)

ʔu]ta[je]: (顎)、 ni]bu[tu]: (おでき)、 t'u]m[be]: (唾)、
ja]:[nu]tçu (家族)、 so]:[de]: (兄弟)、 k'a]n[tça]: (子供達)、
haro]:[dʒi]: (親戚)、 se:]k'u[sal: (大工さん)、 ʔa]m[ma]: (母)、
me]:[ra]bi (若い娘)、 gi]:[ha]: (かんざし)、 t^hi]nu[guli (手ぬぐい)、
na]ri[mu]N (果物)、 du]:[çi]: (雑炊)、 t^hi]n[dzo]: (天井)、
çi]n[tçi]N (便所)、 sa]n[çi]n (三味線)、 mun]nja[ra]: (麦わら)、
çi]ma]ju[mil]ta (方言)、 sa]mba[ra]: (箕)、 o]:[da]: (運搬用モッコ)、
su]:[ka]: (急須)、 mi]su[na]ti (一昨年)

(2011年9月 国立国語研究所喜界島合同調査の結果から)

このように、名詞の長さ(拍数)が4拍以上になると、この方言(上嘉鉄)ではHLHL、HHLHLのような語末が下がって終わる型を持つ単語の数が多くなっていき、これに対してHHLH、HHHLHのような、語末が上がって終わるアクセント型を持つ単語の数が減っていく。

つまり(少なくとも体言について言えば)、その拍数が長くなればなるほどHLHLパターンのほうがHHLHパターンよりも生産的になる、と言えるだろう。

さらに、今回の調査で明らかになったのは、「A 対 B C」タイプの合流を遂げた小野津方言でも同様なことが言えるということである。すなわち、上嘉鉄方言でHLHLというリズム構造で出現する多くの単語(すべてではない)が、小野津でも同じような構造で出現したのである。たとえば、次のような単語がそれにあたる。

(14) 喜界島小野津方言におけるHLHL(HHLHL)のリズム構造を持つ語彙

ni]bu[tu]: (おでき)、 tsu]b[bě]: (唾)、 ja]:[nin[dʒu]: (家族)、 kjo]:[de]: (兄弟)、
k'wa]n[kja]: (子供達)、 ʔa]ro]:[dʒi]: (親戚)、 se:]ku[sal: (大工さん)、
ʔa]m[ma]: (祖母の意味)、 du]:[çi]: (雑炊)、 sa]n[çi]n (三味線)、
sa]mba[ra]: (箕)、 ʔo]:[da]: (運搬用モッコ)、 mi]tsuna[ti]: (一昨年)

(2011年9月 国立国語研究所喜界島合同調査の結果から)

したがって、(1~3拍までの名詞についてだけ言えば、小野津と上嘉鉄のアクセント型はかなり異なっているものの)4拍以上の単語になると、そのアクセント型が両者で似

通ってくるのである。つまり、「AB 対 C」「A 対 BC」のどちらの合流タイプの方言においても、単語が長くなるにつれて HLHL (HHLHL) のリズム構造の単語が増加していく、という興味深い現象が明らかになった。

これはまだ仮説の段階に過ぎず、今後の調査によって確認していかなければならない事であるが、このように長い単語において HLHL のような語末が下がって終わるアクセント型が多くなる、という音韻特徴は、この上嘉鉄だけでなく、喜界島のほぼ全域について言えるのではないだろうか。つまり HLHL (HHLHL、HHHLHL) のように語末が下がって終わる型が、喜界島全域を通じて無標なリズム構造だ (松森 2011) とと思われるが、これは、今後、この地域の外来語や新語も数多く収集して検証していく必要がある。

さらに言えば、HLHL 型の生産性は、複合名詞のアクセントを決定する際にも働いている。今回の喜界島調査では複合語の形成規則については調査することができなかったのだが、私の 2000 年の赤連方言のアクセント調査では、次のような複合語を作成して発音してもらったところ、そのすべてが下がって終わるアクセント型 (HLHL、HHLHL 型) で出現した。(ちなみにこの赤連も、上嘉鉄と同じ「AB 対 C」タイプの合流を遂げた方言である。)

(15) 赤連方言の複合語 (2000年3月赤連方言調査結果から)

habi]ba[ku]R (紙箱)、hari]ba[ku]R (針箱)、
bintoR]buQ[ku]R (弁当袋)、juRbiN]buQ[ku]R (郵便袋)
sjima]muQ[cji]R (島餅)、 mamI]muQ[cji]R (豆餅)、
Futu]muQ[cji]R (蓬餅)、guma]muQ[cji]R (胡麻餅)
hiru]ba[te]R (にんにく畑)、 hana]ba[te]R (花畑)、
bira]ba[te]R (萰畑)、 cjiuri]ba[te]R (胡瓜畑)、
guma]ba[te]R (胡麻畑)、 tuQsoR]ba[te]R (南瓜畑)

この (15) に示された複合語の後部要素のうち、「箱」(ha[ku, ha]ku [nga) は語末が高く終わる型 (HLH 型) で、「袋」([FuQ]ku, [FuQku nga)、「餅」(muQ[tji]R, muQ[tji]R nga)、「畑」(ha[te]R, ha[te]R nga) は語末が下がって終わる型 (LHL 型) であるが、この方言の複合語アクセントはその後部要素のアクセント型とは相関性が見られない。

一方、前部要素のアクセント型がこれらの複合語のアクセント型を決定しているわけでもない。ちなみにこれら複合語の前部要素のアクセント型は、「紙、弁当、島、豆、にんにく、花、萰、胡瓜」がその単独形が上がって終わる型、「針、郵便、蓬、胡麻、南瓜」は単

5 日本祖語系数詞のアクセント：今後の課題

今回は喜界島の中でも上嘉鉄や坂嶺など、「A B 対 C」タイプの合流を遂げた方言だけに焦点を当てて、喜界島語彙のアクセント特徴を考察した。今後は、「A 対 BC」タイプの合流を遂げた小野津、志戸桶の数詞もさらに調査して、検討してみる必要がある。

これまでの議論から予測されるのは、「A 対 BC」タイプの合流を遂げた小野津、志戸桶方言では、「2つ、3つ、4つ、6つ、8つ、とお」がまとまって同じ型で出現し、「1つ、5つ、7つ、9つ」がもう一つの型に入るのではないかと推測される。しかし、もしこれらの方言においても、上嘉鉄同様、4拍以上の長さの語彙のアクセント型が生産的な HLHL (HHLHL, HHHHL) 型に収束していく傾向が存在するとすれば、長い数詞がこの型で出現する可能性が高い。

残念ながら今回の調査では、この2つの方言（小野津、志戸桶）の数詞について、このことを検証するために十分なデータが得られなかったため、これは今後の調査の課題としたい。

一方、喜界島の外に目を向ければ、小野津、志戸桶以外にも、「A 対 BC」タイプの合流を遂げた琉球諸方言は数多く存在する。たとえば、奄美大島南部の瀬戸内町の諸方言がその典型だが、そのような方言では、今回指摘したような「1つ、2つ、3つ、4つ、6つ、8つ、とお」対「5つ、7つ、9つ」のような型の対立が保たれているのではないだろうか。この仮説の検証も今後の課題としたい。

さらに上嘉鉄や坂嶺と同様な「A B 対 C」タイプの合流を遂げた方言は、喜界島以外にも存在する（たとえば、宮古島^{よなは}与那覇や伊良部島^{さらはま}佐良浜など）。もしこれらの諸方言で、喜界島のような長さによる型の制約がなければ、その数詞は、「1つ」対「2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ、8つ、9つ、10」のような型の対立を保って出現することが予想されるが、そうなっているだろうか。これについても、今後の調査で確認したい。⁸

参考文献

- 久野マリ子(1986)「奄美方言の数を表す接尾辞—沖永良部島知名町の場合—」
『琉球の方言』10号:76-122、法政大学沖縄文化研究所
- 松森晶子(2011)「喜界島祖語における3型アクセント体系の所属語彙—赤連と小野津の比較から—」『日本女子大学文学部紀要』60号:87-106
- ローレンス、ウェイン(2008)「与那国方言の系統的位相」『琉球の方言』32号:59-67、
法政大学沖縄文化研究所

⁸ 私見だが、特に「A B 対 C」このようなタイプの系列の統合を遂げた方言に、長い単語（特に複合語）が特定のリズム構造に収束していく傾向が色濃く観察されるのではないかと考えている。この理由については、また稿をあらためて論じることとしたい。